

---

# Fate/Unlimited World Re

夢幻白夜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Fate/Unlimited World Re

### 【Nコード】

N1012BA

### 【作者名】

夢幻白夜

### 【あらすじ】

日常。それは10年前にもあつた筈だった。

幸せ。それは10年前に得ていた筈だった。

火災。それが10年前に全てを奪い去った。

氷室 鐘と衛宮 士郎、そしてその周囲の人物たちが聖杯戦争に巻き込み、巻き込まれて日常と非日常を過ごす物語。

その中で二人はかつての夢を見る。幸せだった夢を見る。

繰り返される戦争、殺し合い。

繰り返される悲劇もまた、二人に牙をむくのか。

語られぬ二人の物語は、この第5次聖杯戦争で再び語り継がれる。  
この作品は Arcadiaでも連載しています。

## Prologue (前書き)

この作品は「Fate/Stay night」の氷室ルートを構想した作品となっております。

また、この作品には独自解釈や独自設定などが含まれております。

それを了承し構わない、という方はどうぞお読みください。

少しでも多くの読者様に読んでいただけるよう、日々精進してまいります。

今後とも「Fate/Unlimited World Re」を宜しくお願い致します。

この作品はArcadiaでも連載しています。

## Prologue

子供の頃に置いてきた 夢を思い出した  
幼い色の哀しみを 細く甘く歌う

何も終わることのない 永遠を知っていた  
もう誰も語らない 二人の物語

約束を残して 君は何処へ行く？  
灯火を残して 劫火に消えて行く

ずっと遠くへ歩いていく 懐かしい面影  
ずっと遠くが君の家 辿り着けはしない

夢のような永遠は閉ざされたままで  
傷は深く隠されたままで 消えていく夢の道  
君がもう見えない

いつもの場所を抜けて 君は帰っていく  
振り返り手を振って 明日へ去って行く

君を好きになつて永遠は終わる  
生きていく喜びと痛みが始まる

## 第0話 全ての始まり

第0話 全ての始まり

### 第一節 とある夏の日

夏。

日本は記録的な暑さを記録していた。

とある場所では熱中症患者が大量に出て救急車が大忙しだったり、またある場所では四十 越えを記録したりと日本中が暑い日々を強いられている。

ここ、冬木市も例外ではない。

冬木市自体も記録的な暑さを更新しており、テレビニュースでは小まめに水分補給を摂るようにと報道されている。

そんな街で子供達に人気な場所がある。隣町とつながる冬木市の赤い大きな橋である。

と言っても橋が人気なのではない。子供達が橋に興味を持つ事はなかなか無いだろう。

人気があるのはその傍にある公園。そこはもっぱら子供達の遊び場となっていた。

滑り台で滑って遊ぶ子供。ブランコに乗って親に背中を押してもらいながら楽しんでいる子供、鬼ごっこをして遊ぶ子供。

その子供達の親達は子供の相手をしたり、あるいはベンチに座って他の親と交流を楽しんだりと平和な一日を過ごしている。

夏休み真っ盛りなので学校に通うハズの平日でも公園は賑わってい

た。

そんな公園で一人、ポツンと設置されているベンチに座っている子供がいる。

年齢は七歳前後だろうか、灰色の長髪が特徴の女の子。白のワンピースを着て麦わら帽子を被っている。

公園にいる子供達と遊ぶわけでもなく、風景を眺めているわけでもないらしい。

ただ一人で静かに座っている。木陰に入ればいいのに彼女はそれをしていない。

「  
」

と、ここでようやく少女が立ち上がった。

流石に我慢が出来なくなったのだろう、木陰へと歩き出した。

だが、長い時間座っていたため軽い熱中症になっていた。少し歩くだけで彼女がフラつき、こけてしまった。

「  
いた、・・・」

そう言って立ち上がろうとした灰色長髪の少女に手が差し伸べられる。

少女は手を差し伸べてくれている人を見る。

「大丈夫？ ひーちゃん」

“ひーちゃん”と呼ばれた少女は差し伸べてくれた子の手を取り立ち上がった。

大丈夫？と聞かれたからには何らかの答えは返さなくてはいけないだろう。

「大丈夫だよ、し・・・」

手を差し伸べてくれた子の名前を呼ぼうとするが、再びフラついて倒れそうになる。

その少女の体を赤い髪の少年が抱きとめる。

「駄目だよ、ひーちゃん。無茶なんかしたら。ほら、あっちに行こう。」

赤い髪の少年は木陰に彼女を連れて行く。彼女はされるがままに少年にくつつきながら歩いて行く。

木陰にあるベンチに座る二人。暑い夏ではあるが、木陰に入ることので若干の暑さは和らぐ。

「はい、ひーちゃん。冷たいお茶。これ飲んだら少しは楽になると思うよ。」

赤い髪の少年が少女に持参した水筒を渡す。

「ありがとう。」

少女は感謝の気持ちを伝え、少年が渡してくれた水筒のお茶を飲む。それを見た少年がポケットからハンカチを取り出し、少女の額の汗を拭く。

「ありがとう。」

少女は少年の顔を見て向日葵のような笑顔でお礼を言う。かくいいう少年も笑顔でそれに応えた。



木陰に移動してから少し時間が経った頃に、少年が少女に訪ねる。

「今日はどこ冒険しようか。」

少年は目の前にある遊具で遊ぶ気はないらしい。

普通の子供ならブランコなり、滑り台なりジャングルジムなりに遊びに行きそうなものである。  
対して質問された少女も

「どこでもいいよ。一緒に遊べたら私は楽しいから。」

と、遊具など興味を示さないように答えた。

「それじゃあ僕の家にくる？庭に向日葵が咲いたんだ。それ見ながらスイカを食べようよ。」

「うん、それじゃ行こう！」

そう言っただけ二人の子供は少年の家に向かうため歩き出した。手を繋いでまるで仲の良い恋人のように。

今日も夏の日差しは暑い。けれど、二人一緒にいる彼と彼女にとっ  
てそれはあまり関係のない話のようだった。

暑い道を二人は手を繋ぎ歩く。

何分経っただろうか、公園の姿形は見えない。

その代わりに少年の家が見えてきた。二人はその間も様々な会話をしていた。

昨日の晩御飯は何だった？ とか、今日は何時に起きた？ とか、今日は約束の何分前に来たの？ とか。

二人は明確に集合時間を決めている。

けれど揃って二人は相手よりも先に集合場所へ着こうとするため、集合時間よりも早く集合場所に集まる。

結果、会う時間は早くなり、一緒にいる時間は長くなり、遊ぶ時間も長くなる。

二人にとってそれは幸福の時間。好きな相手と少しでも長い間一緒に遊べるという時間。

だから二人は一日の大半を一緒に過ごしている。

二人の両親も互いに顔見知りのため、互いが互いの家に行っても歓迎されていた。

家に入る二人。

彼の母親が彼の要望通りにスイカを切ってもってくる。

二人はそれを食べながら庭のきれいに咲いた向日葵を見ている。

スイカを食べ終わり、次は向日葵のスケッチ。

少年は絵を描くのが得意ではないらしく、悪戦苦闘していた。

対する少女は絵を描くのが得意らしく、大よそ七歳前後の子供が描いたとは思えないきれいなスケッチを描きあげていた。

「ひーちゃん、上手だねー。いいなあ、僕もひーちゃんみたいに上手になりたい。」

少年は彼女の絵を見るや否や絶賛する。

絶賛された彼女はうれしそうに顔を緩めた。

好きな相手から褒められることは誰でもうれしいものである。

スケッチを終えた二人は疲れたのだろうか、眠ってしまった。

それを見た少年の母親がタオルケット一枚を二人のお腹にかける。

二人の手は繋いだまま。安らかな寝顔で眠っている。

夕方。

先に目を覚ました少女は手を繋いだまま隣で寝ている少年の顔を覗き込む。

「・・・ふふ」

薄らと笑い、ほっぺたを指でつつく。

「う・・・ん」

何度かつついている内に少年が目を覚ました。

「おはよう、しる君」

幸せそうに笑う少女。

「ん・・・、おはよう、ひーちゃん。」

そんな少女を見て笑う少年。

夕食時になるまで、彼の部屋でテレビゲームをすることになった少女。

スケッチとは打って変わって、こちらでは少年の方が強かった。

「わぁー、負けたぁー。」

くやしい、という科白を吐きつつも少女の顔は笑顔だった。

当然、その笑顔が向けられている少年もまた笑顔だった。

二人は幸せそのものであった。

夕食時になり、少女は少年の家でご馳走になることとなった。二人並んで行儀よく食べている。

二人とも嫌いな食べ物は無いらしく残さず食べ終える。

その間も二人は幸せそうに会話をしていた。

そしてその光景を見て、微笑む少年の母親がいた。

夜。

少女の親が車で迎えに来た。

流石にこの時間帯を子供が歩いて帰るのは躊躇われたからだろう。

迎えが来たことに少し残念そうな顔をする少女。

しかし帰らない訳にもいかないので渋々親についていく。

「ひーちゃん。」

少年が声をかける。

少女はその声に反応して振り返る。

「また、明日も遊ぼうね。」

笑顔で少年は手を振っている。

そう、今日という日は終わる。しかし明日という日がまたやってくる。

明日は何をしよう。そんなことを考えるだけで少女は楽しくなる。だから

「うん、明日も遊ぼう。絶対に約束だよ、しろ君！」

そうして少女は帰っていく。

少年は少女の乗った車を見えなくなるまで見送っていた。

その姿を見た少年の母親が少年に話しかける。

「士郎、鐘ちゃんとは本当に仲がいいのね。大切な人は大切にしないさい。泣かしちゃだめよ？いい、お母さんとの約束よ？」

そう言っつて小指を出してくる母親。  
指切りのつもりだろう。

「うん、わかってるよ。ひーちゃんを泣かせる悪い奴は僕がやっつけるんだから！」

いかにも歳相応の返答をしながら小指を出し、指切りをする少年。そんな少年の言葉を聞いて母親はくすり、と微笑んだ。

## 第二節 とある冬の日

冬。

夏とは打って変わって冬木市は一段と寒くなっていた。まるで季節が夏と冬しかないように感じるほどだ。春と秋がどこにいったのか、と若者なら神様にすら問いたただらう。

しかしそんな寒い冬でも元気滲刺な子供達にとってはあまり関係がない。

所謂“子供は風の子”というやつである。

そしてそれは赤い髪の少年と灰色長髪の少女にも当てはまる。

といっつても外の遊具で遊びまわっているわけではない。

公園の中を散歩したり、少し遠出をして　　といっつても歩いていける距離だが　　様々な景色を見たりと普通の子供が見れば「何

が面白いの？」と聞かれてもおかしくはないものだった。しかし、二人にとっては楽しい。

毎日会っているにも関わらず自然と会話は弾み、持参したお菓子や飲み物でプチピクニックなこともしている。

少し大人びた感じもするが、持参している食べ物などを見ているとやはり子供だという事を思い知らされる。

二人は歩く。

人気の少ない道から公園を抜け、そして人通りの多い道へ。

大きい都会、というわけではないがそれでも小さい子供が歩くには少し威圧されてしまう。

しかし二人には関係ない。いつも一緒の二人、様々な場所を歩いて回って様々な景色を見てきた二人はこういう道も歩いてきたからだ。

歩いている最中、少女が地面の段差に躓いてこけてしまった。

膝を小さく擦りむいた程度だが、やはり痛いものは痛い。少年は少女を持ち上げて肩を貸すように二人で歩いていく。

その距離は手を繋いでいるときよりもさらに近い。

そうして少し小さい公園があったのでそこに入り、ベンチに座って休憩していた。

「大丈夫？ひーちゃん。」

「うん・・・ちょっと痛いけど平気だよ。」

擦りむいた膝の傷を見ながら二人が会話をしているところに、女性が近づいてきた。

白い帽子に白いコート、そして白い長髪に赤い目をした女性だ。

「あら？怪我をしてるわね、大丈夫？」

白い女性は少女の傷を見て、声をかけてくる。

「え……と、大丈夫……です。」

見知らぬ人から突然声をかけられた少女は戸惑い、少年の服を握る。少年は見知らぬ女性から少女を守るように少女の前に立った。

少年少女はそれぞれの親から「知らない人にはついていっちゃんいけない」と教え込まれている。

その相手が男性であろうと女性であろうと“見知らぬ人”にはかわりないのだから警戒している。

しかし、その女性の方かというとそんな事を気に止めた様子もなく近づいてきたもう一人の黒い男性に声をかける。

「ねえ、セイバー。絆創膏ってあったかしら？」

一言で言うところ「白」の女性が、一言で言うところ「黒」の男性、セイバーに声をかける。

「は？絆創膏……ですか。確か鞆の中に一枚ほどありますが……アイリスフィール、どこか怪我をされたのですか？」

「いいえ、私じゃないわ。その……灰色の長髪の子。膝に擦り傷があるみたいだから。渡そうかな、って。」

アイリスフィールと呼ばれた白い女性は黒い男性にそう告げる。

その意志を理解した黒い男性は鞆の中から絆創膏を取り出し、白い女性に手渡した。

「はい、これを傷口に張れば、スカートが膝に触れてもスカートが汚れることも、傷が痛むこともないわ。」

そういつて白い女性は少女に絆創膏を渡した。  
それを受け取った少女は一瞬きよとん、とした顔になるが相手が親切にしてくれたのだとわかり

「あ……ありがとうございます。」

と、子供にしてはしっかりと礼節を守った言葉使いで白い女性にお礼を言った。

その光景を見た少年も白い女性に

「ありがとう、お姉さん。」

と、素直に感謝の言葉を言う。

それを聞いた白い女性は優しく微笑んで

「ふふ……貴方がこの子の騎士ナイトなのかな？しっかりとエスコート、頑張ってるね。」

と激励した。が、子供である少年少女にはエスコートやナイトの意味がイマイチよく理解できなかつた。

「行きましょう、セイバー。それじゃあね、小さな王女プリンセスさんに小さな騎士ナイトさん。」

最後まで日本人の子供にはイマイチ理解できない言葉を言い残して二人は去って行った。

二人が視界からいなくなるまで茫然とその姿を見ていたが、二人が見えなくなつたところで少年が少女に訪ねる。



「何だったんだろう、あのお姉さん達。」

しかし、そんな事を知る由もない少女が答えられる筈もなく

「多分・・・外国の人だよ、きっと。」

と、誰がどう見てもわかる事を答えとして返していた。

夕刻時。

今日は不思議な人達と出会ったものだ二人思いながらいつもの場所  
所で別れる。

別れるときはすごく寂しい。それが好きな人となら尚更である。

それは少女にとっても同じ。だからいつまでも一緒にいたかった。

しかし帰らない訳にはいかないし、少年を家に連れて泊めるなんて  
こともできない。

だから寂しくても別れなければいけない。

そしてこれから少し、ほんの少しの間だけ二人は会えなくなる。

「明日から遊びに行くんだよね？ひーちゃん。」

「うん・・・私はしろ君と一緒にいたいけど・・・」

「ひーちゃん、お父さんとお母さんが遊びに連れて行ってくれるん  
だから、ちゃんと楽しまなきゃ駄目だよ。」

そう言って少年は少し暗い顔をした少女に笑いかける。

「帰ってきたらどんな事してきたか教えてね、ひーちゃん。」

それは。

また帰ってきてから遊ぼうね、という約束。  
だから、少女も笑う。屈託のない真っ直ぐな笑顔で。

「うん！お土産も持ってくるから一緒に食べようね、しろ君！」

二人はそう言って別れた。

少しだけ会えないけれど、また必ず会って一緒に遊ぶ。  
二人はそう心に誓った。

### 第三節　そして絶望がやってくる

灰色の長髪の少女が家に帰宅したのは夜も遅い時間帯。

まだあの少年も起きているだろうが、今から会いに行くことはできない。

（だから、明日）

そう思って少女は眠りにつく。

少女の両親も旅行の疲れをとるために床に就いた。

### interlude In

地響きがする。

視界は真っ赤に燃え上がり、あちこちから黒い雲が立ち上る。  
走れるだけの体力も無く、走るだけの意志もない。

目が覚めて起きたら周囲が燃えていた。

地響きがしたと思ったら家が崩れ、赤い髪の少年の頭上に屋根が落下してくる。

それを父親が逃がすが、そのせいで父親が屋根の下敷きに。

助け出そうと少年が父親の元へ向かおうとするが、父親の声と母親の制止により逃げることになる。

母親と一緒に家を出ようとする。だが、家の完全崩壊が少年に襲いかかった。

母親は少年目がけて落下してくる家の残骸を身を呈して助け出す。

その結果少年は助かったが、身を呈した母親はその残骸の下敷きとなった。

少年は必至に母親を助け出そうとするが、火の手が強く近づくことができない。

それでも助け出すために泣きじゃくりながらも近づこうとする。

しかし、母親がそれを許さなかった。

「逃げ・・・なさい！ここから遠くに、逃げなさい！士郎はいつも街を歩いていたんでしよう！？なら、士郎なら逃げ切れる。だから・・・」

「嫌だ、いやだ！なんで、お母さんが、お母さんも・・・！なんで、なんでなんで！」

彼は現状が理解できない。子供の彼にとって今まで何もかわらない一日だった筈だった。

だが、夜眠って夜中に目を覚ましたら赤く染まっていた。

「士郎！早く・・・逃げ・・・なさい。貴方が死んだら・・・鐘ちゃん・・・悲しむでしょ。お母さん、言った・・・よね。泣かせない・・・て」

「  
」

火の手がどんどん少年にも迫ってくる。

「お母さんとの・・・約束、破る気・・・？ 太郎。」

「約束は・・・守る、お母さん。」

泣きじゃくりながら、母親の言葉を理解しようとする少年。

「なら、・・・ここから逃げなさい。鐘ちゃんの家は・・・わかるでしょ・・・？ 少し遠いけど、太郎なら預かってくれる・・・」

「でも、お母さん、お母さんが・・・！ お父さんも・・・！！」

火の手が間際まで迫っていた。これ以上脱出が遅れようものなら少年も家の中で焼け死ぬだろう。

「太郎！ 早く行きなさい！！」

母親の最期の叱責。それは少年が今まで聞いたどれよりも強い口調だった。

耐えきれなくなった少年は出口に向かって走り出す。

その間にも火の手が襲いかかる。その火が母親のいた場所を包み込んだ。

だが、少年は振り返らない。振り返るな、走って進めと言われたから。

家を出て、見慣れた筈の街を走る。

その街はあまりにもかけ離れていた。

走り続けた少年。

だが、その間にも落下物の障害にあつたり、瓦礫に躓いてこけて血が出たりと彼の体はボロボロになっていた。走れるほどの体力もなくなりただ茫然と歩いている。それ以上に彼の精神は完全に果てていた。

両親が目の前で死に、街のあちこちに倒れている人がいる。

(ひーちゃ・・・ん)

最後の理性がそれでも彼女の家に向かおうと脚を動かしていた。そこにふと、何かが見界に入ってきた。

瓦礫の下敷きになっている人がいる。もう何度も見た光景。だが、それは今までのどれとも違う衝撃を与えた。

( あ )

その下敷きになった人は俯せに倒れている。顔は見えない。首より下が瓦礫の下敷きになっていてどうなっているかわからない。年齢は少年と同世代だろうか、小さい子供のようだ。

女の子らしく、髪が長い。

そして、その髪が黒色のはずなのに灰色に見えた、見えてしまった。

「 「

違う、と少年は否定する。

だが見えてしまった。

そして想像してしまった。

限界だった精神に強大な負荷がかかった。

その時。

少年の言葉が失われた。  
手はそこで憤怒を失くし、  
足はそこで希望を失くし、  
己はそこで自身を失くした。

そして絶望が少年を支配した。

ここに、「しろ君」と呼ばれていた少年は今、呆気なく  
死を迎えた。

### interlude Out

地響きで跳び起きた少女の両親が、夜にも関わらず明るくなっ  
ていることに気づく。

咄嗟にベランダに出て明るくなっている方角を向く。

大火災。

一言で、的確に表現するならその一言に尽きた。

だが、その大火災は少女の両親が今まで見てきた火災のどれよりも  
遥かに大きいものだ。

啞然としている両親のもとに灰色の長髪の少女がやってくる。

「お母さん・・・どうしたの・・・」

まだ眠いのだろう。目は完全に開きつてはいなく、目を擦りながら  
ベランダに出てきた少女。

だが、目の前の光景を見て意識が覚醒した。

「・・・え？」

少女は啞然とする。

ベランダから眺めた景色はこのような景色だっただろうか。違う、と少女は断言する。

あの少年と一緒に見た景色はこんな赤くはなかった。その時に気づいた。

あの燃えている方角は、いつも少年と会うために向かっている方角だと。

「しろ・・・君・・・！」

そう呟いた後、玄関へ向かおうと走り出す少女。だが、父親がそれを止める。

「待ちなさい、鐘！どこへ行くんだ！」

「しろ君が！しろ君が、あの炎の中にいるの！だから、だから助けに行かなくちゃ！」

泣きじゃくりながら父親の手を振り払おうと体を激しく動かす少女。だが、それを許す両親ではない。今あの炎の中に突っ込めばどうなるかなどわかりきっている。

だから止める。むざむざ自分たちの娘を死に行かせるわけにはいかない。

「鐘！落ち着きなさい、消防車がやってきて火を消してくれる！士郎君もきつと助かる！だから」

「やだ、やだやだやだあー！！！」

もう正常な判断すらできていない少女。

両親ですら見たことのないほど泣きじゃくりながら、必死に炎の中

へ進もうと玄関へ向かう少女。

「いい加減にしなさい!!」

父親が大声で叱責する。

ビクッ、と少女の体が震え、動きが止まる。

その少女を父親は無理矢理少女の部屋へ連れて行き、ベッドの上に放り投げた。

「きゃあ!」

小さな少女が宙を舞い、ベッドの上に落ちる。

それを確認した父親は部屋の扉を閉め、そして出られないように扉の前に家具を置いた。

ドンドンドン!と叩かれる音がする。

「出して!出してよ、お父さん!」

泣きじゃくりながら、それでも必死に抵抗の声を上げる少女。

その声を聞いた両親が心を痛めながらも、鬼にして少女に言う。

「鐘、お前が行ったところで何もできない。消防車に任せるんだ。」

「鐘、貴女は士郎君が生きている事を願いなさい。・・・きっと生きていると信じていれば生きているわよ。」

消防に任せた所である大火災を早々に鎮火することはできない。

それにただ願うだけで人が救われるわけもない。少女の両親はそれをわかつている。



だが、現に少女の両親にさえできないことがない。故に無意味だと心のどこかで諦めていてもそれをするしかできなかった。

いくら少女が全力で叩いても扉や壁、家具が壊れることはない。

手が赤くなるまで叩き続けた少女はベッドの上で枕を全身に強く抱いていた。

何もできない。だから、少女は母親が言ったようにただ願うことをしていた。

それに一体どれほどの意味があるのかもわからない。けれども何もできない以上願うしかない。

はあはあ、と息遣いが荒い。しかしそれに反して枕を抱く力はどんどん強くなっていく。

「しろ君・・・しろ君・・・！」

目は泣きじゃくったせいで赤くなっている。

顔を埋めていた枕は涙で濡れている。

不意に最後に会った時の事を思い出す。

あの時は不思議な人に出会った。

あの時は怪我をして絆創膏をもらった。

別れるときは絶対次も遊ぼうねと違って別れた。

体が熱くなる。心が熱くなる。

少女の体の震えは小さくなり、そして彼女の意識は闇へ落ちた。

#### 第四節 忘却

火災だった。その火災は全てを焼き尽くした。

## Interlude In

気がついたら焼野原にいた。

大きな火事があった。見慣れた筈の街は一面廃墟になっていて、映画で見る戦闘跡のようだった。

建物のほとんどが崩れていてその中で自分だけが原型を保っているのが不思議で仕方がなかった。

この周辺で生きているのは自分だけ。

生き延びたからには生きなくちゃ、と思った。

まわりにいた人達のように、黒焦げになるのがイヤだったわけじゃない。

きつとああんりたくはない、という気持ちより。

もつと別の理由で心がくくられていたからだろう。

しかし希望はもうなかった。

周囲には倒れている人がいる。

さっきの自分の前には黒い髪の子が俯せになって瓦礫の下敷きになっていた。

なんであそこで立ち尽くしていたかわからない。

周囲を見渡してもそこは赤い世界。絶対に助からない。

幼い子供ですら理解できるほど、その場所は地獄だった。

そうして倒れた。

周りには黒焦げになって動かなくなった人たちがいる。

空を見上げたら今すぐにも雨が降りそうな空模様。

それならいい。この火事も雨が降れば終わる。

苦しいなあ、なんて息もできないくせに口を動かした。

両親が死んだというのにはわかった。周りにいなかっただから。

家が無くなったというのも覚えてる。

家があった場所も覚えてる。

しかしそれだけだった。

もう何も残っていない。

残っているのは楽しくもない記憶だけだった。

簡単な話。何もかも失って、それでいて子供の体が残っている。  
要約すれば。

生きる代わりに、心が死んだのだった。

目を覚ましたらそこは病院。

周囲には怪我をしている人達がいる。けれど、みんな助かった人達らしい。

数日が経ち、物事が何とか呑み込めるようになった。

そしてここ数日の事は思い出せた。

ただ火災以前の事が抜け落ちてしまっていた。

たまに来る医者は、「大丈夫、少しずつ思い出すよ」と、その一言だった。

両親は消えていて、体中が包帯だらけ。

状況はわからないけど、独りになったということはわかった。

納得するのは早かった。周囲にいる人はみんな子供だったから。

これからどうなるのだろう、なんて考えながら漠然と天井を見ていた時に、その人はやってきた。

「こんにちは、君が士郎君だね？」

その人はしわくちやの背広にボサボサの髪だった。

「率直に訊くけど、孤児院に預けられるのと初めて会ったおじさんに引き取られるのと、どっちがいいかな。」

「親戚なのか、と問うと赤の他人だよ、と答える人。」

ここに倒れている身としたら、どっちに行こうとも同じ。だったら、この人についていこうと思った。

「そうか、よかった。なら早く身支度を済ませよう。新しい家に一日でも早く慣れなくっちゃいけないからね。」

そう言っただけでその人は慌ただしく荷物をまとめる。慣れていないのだろうか、子供から見ても雑だった。

「おっと、言い忘れたことがあった。うちに来る前に一つだけ教えなくちゃいけないコトがある。」

これからどこに行く？なんて気軽さで言うその人。

「うん。初めに言っておくとね、僕は魔法使いなんだ。」

あの大火災から既に数日が経過していた。

テレビニュースでは連日冬木市の大火災が取り上げられ、『大火災！！死者500人越えか！？』や『被害家屋は数百世帯！』などと言った報道が飛び交っている。

その報道を見るたびに少女はテレビのチャンネルを変える。

今の少女にとって必要なのは死者の数ではない。ましてや焼け焦げた家の数でもない。

生存者の確認。

それが彼女にとって最大の問題。

だが、どれもあの少年が保護されたという情報はなかった。

彼女の父親も生存者の確認のため仕事場である役所や病院など、火災地一帯は通信インフラがどこも壊滅状態でロクに情報が手に入らないが、それでも駆けまわっていた。

日に日に弱っていく少女。

少女と少年の仲がかなりよかったことは互いの両親も知っている。

あの少年と一緒に居た時の少女が一番楽しそうだったということも知っている。

あの時の笑顔は本当にかわいいものだった。

だが、今はその影も形もない。

一晩中泣きじゃくって眠った少女は、完全に枯れていた。

そしてすでに数日。発見が遅れれば遅れるほど生存確率は低くなる。少女は幼いながらもそれを理解していた。だから、必死に生存者の確認をしている。

あの少年が、少女が好きになった少年が生きていると信じて。どこかに保護されていると信じて。

しかし。

とうとうその日はやってこなかった。  
父親が帰宅すると、少女はすぐに駆け寄って少年がいたかと確認する。

いつもの父親なら「まだ回っていないところがあるからわからない」と答える。

しかし今日の父親から出た言葉は違った。父親は言つのを渋るがそれでも答えを聞かせると乞う少女に言う。

「彼は見つからなかった・・・、鐘」

その瞬間。

彼女の足元が崩れ去った。

欠けてしまった顔から血の気が引いていく。

自分の心の支えだった少年がいなくなった。その事実が少女の体を、脳を、心を蝕んだ。

立っていた足に力が入らなくなり両膝をついて、座り込んだ。

表情は凍ったまま。

走馬灯のように少女の記憶が再生される。

彼と一緒に遊んだ日々。

彼と一緒に寝たこともあったし、一緒に夕食を摂ったときもあった。お互いがお互いのスケッチをしたこともあったし、いろんな場所に行っているんな景色を見た。

それがもうやってこない。

あの幸せだった日々はやってこない。帰ってこない。

大好きだったあの赤い髪の少年はもういない。

「あ」

枯れたハズの涙が頬を伝っていた。

泣いているのだと気づき、もう帰ってこないと解かり、別れなければならぬと悟る。

しかし、今までの幸せと別れることなど永久にできない。

あの少年といつまでも一緒にいたい。

再生され続ける記憶。

その再生が終わったとき、

ブツン、とまるでテレビの電源を切るように簡単に、そして呆気なく全てが終了した。

## 第五節　　そうして二人はいなくなった

目を覚まして気がつけば、そこは自室の天井ではなかった。

周囲を見渡すと、どうやら病院の個室らしい。

傍には花が入った花瓶があった。

なぜこんなところにいるのだろう、と少女は考える。

しかし何も思い出せない。

けれどそれではいけない。思い出そうと必死になる。

家に居てテレビを見ていた。その内容は？

火災のニュースがやってた。その火災は？

家から離れた所で火災があったからそれを見ていた。その火災前は？

と、そこに。

コンコン、とドアがノックされる音がして人が入ってくる。

両親と医者である。

その姿を見て少女は安堵する。

そして訪ねる。

「ねえ、お母さん、お父さん。なんで私病院にいるの？」

その言葉を聞いた時両親は僅かに顔を俯せる。

両親は医者から少女がショックによる記憶障害だろう、という診断結果を聞いていた。

実際にこの火災で記憶を失ってしまった子供はまだ数人いたらしい。その中でも少女の記憶障害は比較的軽く、実生活には何ら支障はないと判断されていた。

しかし、ある事柄に関しては触れない方がいいとも言われている。

そのある事柄とは、彼女が現在に至ってしまった原因。

もしそれをぶり返せば、次は少女の精神に影響が出かねない。

だから両親は嘘をつく。一生、墓の下まで持っていく嘘をつく。少女を守る為に、優しい嘘をつく。

「体調不良で念のために病院に入院しただけだよ。」

「体調不良……？私、あの火の近くにいたの？」

その言葉を聞いて両親がギクリ、と体を強張らせた。だが、少女の言っている内容が微妙にずれているのがわかり、答える。

「あ、いや違う。火災を見て泣いててね。気持ち悪くなって倒れたんだよ、鐘。」

「そうなんだ……御免なさい、お父さん、お母さん。心配かけちゃった。」

そう言って笑う少女。

確かに笑っている。しかし、両親は思う。

あの本当に幸せそうな自分たちの娘の笑顔は、記憶と共に永久に失



われたんだと。

彼女の記憶から、あの少年に関する記憶が完全に忘却の彼方へと葬り去られていた。

それは彼女が生きるための、脳の防衛本能なのだろうか。

真実は誰にもわからない。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1012ba/>

---

Fate/Unlimited World Re

2012年1月2日11時47分発行